

---

FTH

春春

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

FTH

### 【Nコード】

N7084K

### 【作者名】

春春

### 【あらすじ】

頭脳明晰、スポーツ万能の朝倉純は

大学2年のある日、彼女の若菜を誘拐したという葉書を受け取る。

葉書の指示された場に向かうと純をあわせて60人の人がいた。

そして誘拐犯の言葉は、これから30人に分かれて殺し合いをして

もらいます。あなた方の大切な人を守りたいのなら、殺しあいなさい

はたして純は若菜を取り戻すことができるのか

## 出会い

まさかこんなことになるとはな・

「若菜・・・・」手に持った花を井川家之墓と彫つてある墓石の前に供えた。

だが俺は生きなければならない、若菜の分も、精一杯に。

1年前

朝倉 純は都内有数の名門大学に通う大学生だ。

高校は経済的な事情により都立東城高校へと進学した。そのため進学塾に通うこともできず、普通の人間なら腐りそうな状況下におかれていた。だが純は腐ることはなかった。

元々はそんな気持ちもなかった。これから普通の大学に進学し、普通に就職する。と考えこれから3年間過ごしていくのだろう、高校の入学式では鮮やかな桜、期待に胸膨らます新入生たちとは純の表情は対照的だった。同じ新入生とは思えない元気の無さ、式中の新入生紹介という中でも一人ひとりが大きな声で返事をするが、純はかすれた声だった。

「いつからこんななんになつちまつたんだらう・・・」

式後にトイレで呟いた。中学ではクールだったが人が集まってくるタイプだった。顔立ちも良く、女子生徒からの人気も高かった。しかし純には恋愛には興味が無かった。中学では半数の女子生徒から告白をされているが、全員断っている。けれども断る際には必ずこれからもよろしく、と一言かけていた。

そんな気配りもできた結果、彼には男女問わず沢山の友達がいた。彼が変わってしまったのは受験シーズンとなった10月からだった。この時期になり不況で父親が会社をクビになった。そのせいか険悪なムードで冬休みに入った。都内一とも呼ばれる私立藍聖高校への進学を希望していた。だが新年早々その夢は打ち砕かれた。両親は

険悪な状況は直せず離婚。母元に引き取られたが、お金は高校に行くことすら厳しいものとなった。純は進学は諦めて働くといったが、母親は聞かなかつた。こんな優秀な息子を無駄に終わらせたくないといつも母親は言っていた。

「高校はたいしたところかせてあげられないけど大学ではがんばってね」

毎日のように言われ続けてきた。そんな言葉を純はもうウンザリだというほど聞いた。

このときだろうか、純がおかしくなってきたのは、以下に冷静とはいっても中学生だ。仕方が無い。

そんな精神状態で私立受験が始まった。藍聖は諦め授業料免除制度のある高校をうけた。

しかし原因不明の頭痛で第二志望の私立を落ちた。滑り止めの高校でさえ落ちた。

都立東城の受験ではお釣りの来る内申でさえギリギリのところだった。卒業式の日、彼にはまったくいいほど元気が無かつた。春休みは部屋から出てこなかつた。

そして迎えた入学式も暗かつた。では、純を変えたのは何か？

それが若菜だった。新しい教室の一番廊下側の前から2番目の席に純は座っていた。すでに教室の端からは、あの朝倉つて人かつこよくなーいという女子の声も聞こえた。だが純には目にも入らなかつた。一点に机だけをポーツと見ているだけだった。もうやめろ、俺に話しかけてくるなと思いつながら。

そんな時左肩を二回ポンポンとたたかれた。純がチラッと見るとシヨートカットで可愛い女子が立っていた。

「何か用？」

小さな声で純は言った。

「用って言うわけじゃないけど……ほら同じクラスになった訳だし、これからもよろしくね。」

私は井川 若菜っていうんだ。メールアドレス教えてよ」

と言ひ白色の携帯を出してきた。

「ああ、いいよ」

ポツケから黒い携帯を取り出しアドレスの交換を行った。それを見た周囲の生徒も声をかけては、アドレスの交換をした。純も少し元気がでた。自宅に帰って携帯を見ると早速若菜からメールが来ていた。

「メールしてみました。三年間よろしくね」

短い内容だったが純にはとても嬉しかった。ここから純は若菜を意識し始めた。席は隣で、よく若菜と

喋った。一学期が終わりに近づいた7月5日。純と若菜は日直の仕事で下校時刻を過ぎても学校にいた。

「じゃあ井川さん、日誌を先生に出してくる。さき帰っててもいいよ」

「うん・・・でもいや先に帰るのも何か悪いし、待ってるよ」

「そう?じゃあ行ってくる。」

純は教室をでて職員室に向かった。

「河野先生、日誌を出しに来ました。」

純が声をかけた。河野先生は体育専門で優しい人だった。

「おう、朝倉か、ご苦労だったな。じゃあまた明日な」

「はい、さようなら」

と言つて一礼して職員室を出た。

教室に戻ると若菜は座っていた机から降り純の元に来た。

「あ、終わったの、ところで朝倉君って家どこ?」

「え?・・・ここから歩いて20分くらいの宮崎スーパーってとこの近くだけど」

「私もそっち方面だし一緒に帰らない?暗くて怖いし」

まさかそんなことを言われるとは思ってもしなかった。純は焦りを隠して

「別に・・・いいけど」

と少し顔を赤くして言った。帰り道、若菜がいきなりこういった。

「朝倉くんって頭めちやくちやいいけど何でこんな普通の高校に来たの？」

きた。  
でた。

その質問は聞かれたくなかった。忘れかけていた映像が鮮明に純の頭に映し出された。

「そっくりそのままお返しするよ、井川さんこそどうして？」

苛立ちを何とか隠して言い返した。若菜もかなり優秀な成績をとっていた。

すると若菜は驚くことを言った。

「私？私は……えっと……言いつらいけど父さんが事故で死んじゃってね。藍聖つてところを目指したんだけど、お父さんが頭から離れなくてね……アハハ、落ちちゃった。」

笑いながら若菜は言った。同じだ。過程は違えど父親を失い、藍聖を諦めここに入学したのは。純はこう言った。

「俺のとも親父が離婚してさ、いなくなっちゃった。そんで金がなくて藍聖を諦めたんだ。まさかこんだけ被るなんて……」

「ほんとビックリした。朝倉君もそんな感じだったんだ……」

「うん……」

少し2人は無言で歩いていた。その時だった。若菜がつまづき純に抱きつくようになってしまった。

「だ……大丈夫？」

純は顔が真っ赤になってしまった。

「う、うん大丈夫、ゴメンネ。でも……こういうのも悪くないかな……」

若菜も顔が赤かった。純は

「い……井川さん……好きです。俺と付き合ってください」

言ってしまった。何も考えずに言ってしまった。冷静さを取り戻した純は

「えっと……その……あの……」

焦りまくっている。落ち着け！心の中で葛藤した

「朝倉君……いいよ！私も一緒にいたい」

まさかの返事だった。この流れは10数秒で終わったが純にはとても長く感じられた。

「え……本当に？……本当に俺でいいの？」

純には信じられなかった。

「うん、これからもよろしくね」

それから若菜との交際が始まった。夏休みの補修を回避した2人は思いつきり遊んだ。

夏祭りにも行ったし、映画も観に行った。デート中に他のクラスメイトと会うときもあった。

2学期最初、純は朝食食べながらニュースを見ていた。

ピンポン

家のチャイムが鳴った

「はい」

母さんが出た。誰だろう？

「純、友達だよ」

遠くから母さんの声が聞こえた。

「わかった。すぐ行く」

かばんを持ってドアを開けると、そこには若菜がいた。

「おはよっ！純」

「若菜？……なんで？」

「何でって言われても、通学途中に純の家があるからジャン」

「そ……そうか」

右足の革靴をとんとんと床に打って履き、門を開け若菜の元に向かった。

「わり……」

「うんうん、大丈夫だよ」

こんなことは初めてだった。中学のときに付き合ってるカップルが一緒に通学しているのを見たことがあるが、羨ましいとは思ったこ

とも無かった。だけど案外悪くないなと純は思った。

その時後ろから声がした

「あれ？純じゃん、久しぶり！」

聞きなれた声が聞こえた。中学の親友、山本 隼人が黒い制服で手を振っていた。

「隼人！久しぶりだな！」

隼人は笑顔で2人に向かって走ってきた。

「お前、彼女できてたなんて・・・くそー先を越されたー」

「アホか・・・たく」

呆れ顔で純は若菜に隼人の紹介をした

「こいつは中学時代の友達の隼人、まあアホだけど良い奴だよ」

「へー、そうなんだ。始めまして井川 若菜です。よろしく！」

若菜は隼人に軽く礼をした。

「めっちゃ可愛いやん、純が羨ましいぜ、こんなんなら東城に行くとけば良かった。」

ちなみに隼人は藍聖を受けたが落ち、私立栄徳学院に通っている。

藍聖には劣るが偏差値は67となかなかの上位校である。

「そう言うなって、俺なんか栄徳すら落ちたんだし」

「あん時はびつくりしたぜ、お前が落ちると思ってたな」

「アハハ、まあ東城に入ってから後悔はしてねーよ」

「何言ってるんだ、受験後の誘い全部断っておいて」

そんな談笑をしながら歩いていった。

「じゃあ俺は電車使うからここまでだな」

「おお、じゃあな」

隼人と別れ2人は校門にたどり着いた

「大丈夫かよ？夏休みとか結構見られてんだぜ」

「大丈夫、大丈夫、さあ行こう」

朝のホームルームまで残り少しかった。2人が教室のドアを開けるといきなりクラッカーが、ピアノと鳴る音が聞こえた。

「お似合いだぜー、これからも仲良くしろよ」

クラスのムードメーカー磯村が言った。それを皮切りにいろんなところから声が聞こえた。

だが、どれも馬鹿にする声ではなく、温かい言葉だった。

「みんな・・・」

若菜はとても嬉しそうに呟いた。こんないい仲間が少ない、と純は思った。

そして月日は過ぎ・・・・・・・・

あの悲劇が起こった

## 出会い（後書き）

前書きみたいなもんです。  
次回は早めに投稿します。

招待（前書き）

続きです

## 招待

高校生活も終盤、純と若菜は高校で唯一藍聖大学受験者となった。藍聖大学は日本有数の大学で偏差値70は軽く超える名門大学だ。この高校から藍聖に行った人数なんて4、5人である。しかし2人には苦にもならなかった。いとも簡単に合格してしまった。大学に入学した2人は楽しく過ごしていた。あんな悲劇がおこるなんて・・・

今の2人には知る由も無かった。

2011年11月3日

この日、純は帰宅したが1度も若菜に会わなかった。「あいつが休むなんてめずらしいな・・・」  
携帯を取り出しメールを打った。

TO 井川 若菜

RE:

今日はどうした？  
大学来なかったけど  
どうかしたか？

- END -

5分経った。着信音のB・Zの歌が部屋に鳴り響く



害は加えませんので」

「何が目的だ？」

「葉書に書いてあるとおりです。しかし指示通りにしなかった場合、若菜さんの命はありませんよ．．．では明日お待ちしております。」

そう言つて男は電話を切つた。

そして次の日、純は新宿駅に向かつた。

指示された改札で待つてしているとサングラスをかけたスーツ姿の男が近寄つてきた。

「朝倉 純様ですね私の名は岸本といいます。以後お見知りおきを」

「はあ．．．それより若菜は無事なんだろうな？」

「はい、それはそれは元気です。」

「俺に何をさせる気だ？」

「今は言えませんが朝倉様にはゲームをしてもらいます。」

ゲーム？こいつはふざけているのか？純は考えていた。こいつらの目的がまったくわからない

「ではこの車にお乗りください」

黒いワゴン車だった。外からは目張りされていて中の様子がまったくわからない。純は指示された通り車に乗つた。

そして何も考えず時を待つた。

## 招待（後書き）

次から注目です。  
早めに投稿します

**F i b e r T o H e i p (前書)**

続ぎです。

## F i g h t T o H e l p

一体どれくらい眠ったのだろうか。

葉書を受け取ってから、純は一睡もしてなかった。

そのため、つい車内で寝てしまっていたのだ。

「到着しました。起きてください」

岸本に促され、純は目を擦りながら起床した。

「ここは・・・？」

「詳しくは言えませんが、日本のどこかとも言うっておきましよう」

「何？」

純は岸本を睨み付けた。これからどうなるのか教える。と言わんばかりの形相だった。

「あつはつは、そんな怖い顔をしないでくださいよ」

岸本は純より先に車を降り後部座席のドアを開けた。

「びびぞ」

純は車から降りた。

「す・・・すげえ」

悔しいがそう言わざるをえない所だった。大富豪の住むような場所だった。

とても大きいビルが2つ、豪邸があり、プールやテニスコートもあった。

それを覆うように森が広がっている。

「こちらです。」

岸本は純を呼び歩き始めた。どれくらい歩いたのだろうか？

2キロか3キロくらいは、歩いたのか。森を抜けると大きなグラウンドに出た。

純は驚いた。10や20ではない、かなりの人数がグラウンドにはいた。

そして顔ぶれもさまざまだった。中年の親父、中学生ぐらいの女の子もいた。

そして前方には岸本に似た男がスピーカーを持って立っていた。

「はい！これで全員が揃いました。」

男は元気な声でそう言った。

「このゲームの進行を任せられました。前田、と申します。」

自己紹介を前田がしているとき、純の隣にいた30歳代の男がこう言った。

「お前らは何が目的だ！妻と息子を返せ！」

それを皮切りに様々な怒声が飛び交った。

「そつだ！そつだ！俊をどうする気だ」とか

「母に何をするつもりですか！」

そんな声が聞こえた。

「あんたらは他人の心配をしてる余裕なんてあるんですかね？」

前田が冷たく一掃した。

他人の心配？

純は疑問を持った。それって自分の命も危ないってことか？

「それはどういう意味でしょうか？」

純は冷静に言った。

「ほう、冷静な人もいますねー」

前田は感心しているようだった。

「それに俺の案内人はゲームをするって言っていた。あんたらは俺

らに何をさせるつもりなんですか？」

前田は2回頷き

「では、本題に入りましょう」

と、元気良く言った。純の周囲はシーンと静まり返っている。

「皆さんにやっていただくゲーム、それは……………」

「Fight To Heippです……」

**F i g h t T o H e l p (後書き)**

**早めに頑張ります**

## ルール（前書き）

続きです。

## ルール

「な・・・何だそれ？」

わざわざと周囲の落ち着きも無かった。

「Fight To Help通称FTHは、愛するものを助けるために戦うゲームです。」

「戦うって何で？」

前方のほうから声が聞こえた。

「では、ルール説明をさせて頂きます。1回しか言わないので覚えてください

まず皆さんは合わせて60名いらっしゃいます。

これを私どもでチーム分けさせて頂きました。30名ずつの2チームです。

そして西軍と東軍に別れ戦ってもらいます。基本的には何をしようとかOKです。

ここからが本題です。勝利をするには何をすれば良いのか、

今見えます。あの2つのビルが見えますねあのビルはどちらも20階建てで

1号棟と2号棟に分かれています。1号棟には東軍、2号棟は西軍の本拠地となります。

今現在5時27分です。6時半から作戦タイムとして1時間与えます。7時半にゲームは開始です。

そして勝利条件はゲーム開始24時間後に生き残っている人数が多いほうが勝利です。

なお人数が同じ場合は全員を救済します。」

「え？それなら戦わなければ良いんじゃないか？」

その通りだ。誰も動かずじっとしていれば良いのではないのか？

このゲームは簡単だと純は思った。何らかのコンタクトを取って相手と協力すれば誰も死なずに済む。

全員が安堵の表情を見せた。しかし、前田は驚きの一言を放った。

「そして、プレイヤーの方は敵1人殺害ごとに1億円の賞金を進呈します。」

プレイヤーの方が死亡した場合、連動してその方の愛するものも死亡するようになっていきます」

「何だつて！」

また、あたりが騒がしくなった。

「い・・・一億円・・・本当なのか!？」

純の近くの中年の男が言った。

「嘘を言つメリットが私どもにはありませんので、本当です。」

「では!これよりチームを発表していきます。」

ルール（後書き）

早めにあげます

**作戦会議（前書き）**

続きです。

## 作戦会議

「まずは東軍、朝倉 純様」

名前を呼ばれ、純は係員の前に並んだ。

どんどん名前が呼ばれ純を先頭に列が成された。

純の後ろには、高校生くらいの少女が並んでいた。

今にも泣き出しそうだ。顔は真っ赤、震えているのがわかる。

「では1号棟にご案内いたします。」

係員を先頭に30人の列は行進を始めた。

1号棟に行くまで喋る者は、誰一人いなかった。

長い長い道のりだった。10分くらい歩くと、とても大きなビルが立ちほだかった。

「中にお入りください」

係員は口数少なく、30人を10階のホールに連れて行った。

「広い……」

かなり広い部屋だった。そして係員は説明を続けた。

「今から補足説明を行います。まずはこれをお付けください」

そういうと他の係員が純たちにバンドのような機会を渡した。

リストバンドくらいの大きさで液晶画面がついている。

何だ？これは？

「それには、この2つのビルの地図を見ることができます。さらに仲間同士の連絡も取ることができます。あと、これから1人1人にハンドガンを配布します。」

「ハ・ハンドガンだって？」

純にM92Fが配られた。

「本物だ。」

後ろのガタイのいい30代くらいの男がそう呟いた。

「何故そうだと言いつけるんですか？」

純が聞くと

「私は自衛隊に所属していたんだが、娘を誘拐されてな……」

「ここにいてというわけだ。」

「そんなんですか、では、いざという時は任せても良いんですね」

「ああ、だが一般人を殺すのは多少ためらいがある。そんなことのために自衛隊にいたんではないからな、極力は気絶させておく。私の名は木嶋 隆だ。よろしく」

「朝倉 純です。」

木嶋は２メートル近い身長で、体つきもがっちりしている。もうすでに銃の手入れを済ました。

「無理です！」

突然後ろから若い女性の声が聞こえた。さっきの女子高生だった。

「わ、私、銃なんて使ったことないし……人なんか殺せません！」

彼女は泣き出してしまった。だが係員は冷たい一言を浴びせた。

「それで？じゃああなたが死ぬまでです。」

純の奥底から何かこみ上げるものがあつた。こいつ……、命を何だと思っただいやる。

「ふざけるな！お前ら人の命を何だと思ってるんだ！こんな若い子に人殺しをさせるなんて」

ちよつと言おうとしていたことを木嶋が言った。

「木嶋さん……」

純は木嶋を見た。木嶋は今にも係員に殴りかかりそうだった。

「好きなように言って下さい、ではこれより1時間の作戦タイムです。有効にお使いください」

そう言い残すと係員は部屋を出て行った。その瞬間、純についている機械がピーという音を鳴らし

カウントダウンを始めた。

作戦タイム 残り

59:42

喋ろうとするものはいなかった。そのまま5分が過ぎた。

その時、木嶋が重い口を開いた

「皆さん！私は元自衛隊です。このような訓練は積んでいます。何とか生き残る作戦を考えましょう。」

「そんなこと言われてもどうすりゃ良いんだよ」

金髪の20代が半ば諦め状態で言った。髪は短くワックスでがっちり固めている。

「何とか相手に話して協力できませんか？」

長い黒髪の女性が言った。

「それは無理だな」

眼鏡をかけた知的そうな男があしらった。

「何でですか？誰も死なないで済みますよ」

黒髪が反論した。

「人間が一億円なんて突きつけられてみてください、簡単に裏切りますよ」

確かにそうだった。冷静に考えるとこの男の言っていることは正しい

そんなグダグダな状況がいつまでも続いてしまった。

ついに………

作戦タイム 残り

00:00

作戦会議（後書き）

早めにあげます

**戦闘開始(前書き)**

続きです。

## 戦闘開始

時間の無駄とは、このことだろうか？

結局純たちは、何の打開策も無く、ゲームスタートを迎えようとした。

液晶画面にはこう表示されていた。

ゲーム開始まで

4:32

東30 - 30西

シーンとホールは静まり返っている。

そして………

FTHスタート

ゲームが始まったのに誰一人動こうとはしない

1番に動き始めたのは、あの黒髪の女性だった。

「私……諦めませんから、絶対説得して見せます。」

そう残して黒髪は去ってしまった。

「お・・・おい！無茶だ。戻って来い」

木嶋が呼び止めるが女は戻ってこなかった。

「朝倉君、私はあの女性を連れ戻してくる。みんなと待っていてくれ」

「木嶋さん、無茶をしないでください」

「ああ、わかっている。弾丸は10発か・・・ん？」

木嶋はホールの奥にある大きなダンボール箱が置いてあるのを発見した。

「何だ？あれは」

木嶋が箱に近づいて、中を覗くと

「なるほど・・・」

と呟いて中身を取り出した。木嶋が手に持っていたものは、

ハンドガンの弾だった。

「足りなくなったらここで補充しろって言うことか」

知的眼鏡が言った。彼もまたハンドガンを手を持ち弾丸箱に近づいた。

「一般人が銃なんて使うもんじゃないぞ、やめておけ」

木嶋が制止したが、男は

「それは僕に死ねって言うているんですか？相手は銃を持っているんですよ」

木嶋の制止を聞かず弾薬をポケットに詰め込んで、弾を銃に装填した。

木嶋はやれやれといった表情で

「じゃあ私は彼女を追いかけろ。君たちは敵が来たときに注意してくれ」

と言い木嶋がホールから出ようとした瞬間だった。

パアアアアン！！

一発の銃声が鳴り響いた。

そしてさっきの金髪が言った。

「機械を見る！」

ゲーム残り時間

23時間41分12秒

東29 - 30西

「東………29だって？」

純は呆然としてしまった。

「彼女はもう………生きてはいないだろうな」

木嶋は悔しそうに言った。そしてこう続けた。

「分かったか！敵はもう本気で我々を殺しに来る！いい加減覚悟を決めろ！」

その一声で奥にいた小さい男が

「い……嫌だ……死にたくない……こんなところにいたら殺される……」

うああああああああ！！」

悲鳴を上げて走り去ってしまった。

それを境に

「私だって死ぬのは御免よ！」「俺だって！」

様々な人がホールから出て行ってしまった。

残ったのは、純 木嶋 眼鏡 金髪 女子高生だった。

「やれやれ………残ったのは俺たちだけか、さっきは悪かった

な悪態ついちまっ

谷塚 幸一だ。よろしく」

金髪は見た目とは変わって、穏やかな表情だった。

「私が挑発しなければ彼女は死なずに済んだかも知れん。本当に申し訳ない

長門 健介だ。何かあったらいつてくれ」

眼鏡も態度を変えた。

「わ、私は井村 遥って言います。」

女子高生が深々と頭を下げた。木嶋は

「このゲームで単独行動は危険すぎる。こんな広いエリアだ。彼女の二の舞になるぞ

。ここは二手に分かれよう、私と朝倉君、そして井村さんで行動する。

2人はまだ学生だいざという時は、私が守れる。」

「そうだな」

谷塚は納得したようにうなずいた。

「では、私たちも行きましようか、ここは危険ですしね」

長門は谷塚を連れてホールを出た。

「さて、私たちも行くか……しかし24時間となると弾が足りなくなるときに危険だな……」

木嶋は悩んだように言った。

「私が弾を運びますよ！銃なんか使えないし……2人の役に立ちたいんです！」

井村が提案した。

「そうか……じゃあ頼むよ」

「はい！」

井村は鞆の中に弾を入れるだけ詰め込んだ。

「じゃあ行こうか」

木嶋を先頭に純はホールを出た。

このゲームに生き残るために……

ゲーム残り時間

東 2 3  
2 9 - 3 0 時間 3 6 分 1 9 秒  
西

**戦闘開始（後書き）**

なるべく早く

投稿します

遭遇（前書き）

続きです。

## 遭遇

3人はホールを出た。

このビルは20階建てで1号棟と2号棟をそれぞれ奇数階で連絡橋でつないでいるという構造だ。

今3人は10階にいる。

「これからどうしますか？」

純は木嶋に尋ねた。

「まず絶対に敵に見つかってはいけない。俺みたいに殺しの能力に特化している奴がいなくても限ら

ない、そして安全な場所をさっさと見つけることだな」

やはり木嶋は冷静に物事を見つめている。純が思っていることとまったく一緒だった。

これは心強い。

銃の使い方は、純が理解するには容易いことだった。

「私は君たちのようなまだ若い人に殺しをさせたくはない、いざとなったら私に任せてくれ」

「お願いします。」

そんなときだった。

スタ・・・スタ

足音が聞こえた。物陰から様子を伺うと30歳くらいの男が銃を構えながら歩いてきた。

右肩には西軍の証、青いバンダナがつけられていた。

「敵だ・・・・・・・・2人はここにいなさい」

2人を物陰に隠し木嶋は男が来るのを曲がり角で待った。

何も知らずに男はノコノコと曲がり角を曲がるうとしたときだった。

木嶋は男の銃を持つ、右手に手刀を1発くらわせた。男のハンドガンは吹っ飛び、本人ものけぞった。

「動くな！」

すかさずハンドガンを男に向けた。さすがとしか言いようがなかった。

「う・うるさい！！殺されるくらいなら・・・・・・・・うわあああああああ  
ああ！！」

男は素手で木嶋に襲い掛かってきた。

「止まれ！お前を殺す気なんてない！頼む！止まってくれ！」

木嶋の必死の説得も虚しく、

「うるさああああああああい！！！！！！」

悲痛な叫び声をあげながら男は止まる気配がない

「くそ！！！！！！すまない・・・」

木嶋は男の顔面に1発発砲した。男の頭からは血が噴出しそのまま膝について倒れた。

「木嶋さん！」

純が駆け寄る

「朝倉君か、見ての通りだ。やはり敵も相当の覚悟をもって戦っている。説得は無駄だ。」

「殺しちゃったんですか・・・？」

井村が小声で聞いた。

「やらなかったら、こっちが死んでいた。木嶋さんは悪くない」

「でも・・・・・・」

井村はやりきれない表情だった。純は冷静だった。そして液晶画面を見た。

ゲーム残り時間

23時間10分54秒

東23 - 25西

今のところ東軍は負けている。冷静に分析していたそのときだった。

ゲーム残り時間

23時間10分47秒

東17 - 25西

!!!!!!

この数秒に6人が殺されたけど？  
どういうことだ。

「木嶋さん！」

「ああ、私も見ていた。

いる。殺しの能力が高いアサシンがな」

「やだ！怖いよ……」

井村の声はどんどん小さくなっていく。

6人を瞬時に殺すなんて……どうかしている。

プルルルル

電話だ。

「もしもし俺だ。谷塚だ」

「朝倉です。どうしたんですか？」

「今、俺と長門は2号棟の11階にいる。いい隠れ場所なんだ。誰も来ない、そっちは？」

「1号棟の10階です。早速敵と戦闘をしてしまいました。」

「大丈夫か？それならこっちに来い」

「分かりました。すぐ向かいます。」

「それと！気をつけるよ・・・ありえない奴がいる・・・」

「え？」

「そいつは俺らには気がつかなかったが一気に6人も殺した。」

「そいつだ！そいつはどこにいました？」

「えっと・・・俺らは11階の机の下に隠れてたんだよ・・・」

「！！！！　気をつける！多分奴は11階の連絡橋を使ってそっちに向かったかもしれねえ」

「なんだって！！とりあえず急ぎま・・・」

「伏せる!!」

木嶋は朝倉を突き飛ばした。あと少し遅ければ純は頭を貫かれていただろう。

黒人の男が立っていた。

「ミーツケ」

遭遇（後書き）

早めにあげます。

## 逆転（前書き）

キャラクター紹介

井川 若菜 女 20歳

純の彼女、優しく気配りもできる。いい奴

基本的に天然だが、怒らすと性格が変わり、暴れ狂う

柔道3段

似ている芸能人 北乃 千

## 逆転

「誰だ！」

木嶋がハンドガンを構える。大きいな……

その黒人は木嶋に負けない大きさだった。ボディビルダーのようなガタイ

「オーウ、ソナニケイカイシナイデヨ」

黒人は笑顔で近づいてきた。

「ワタシ、ジャックトイイマス」

「ジャックだつて？……まさか？あのジャックなわけがない」

純には1人の男が頭に浮かんだ。

ジャック・スナイダー、元アメリカ兵士の1人で強い殺人衝動に見舞われやすく

2003年に起こった、ペンタゴン占拠事件では、降伏した犯人を有無を言わず

殺害した。そんな破壊衝動もあって彼は兵士をクビになった。とかそんな感じだ。

「まさか、ジャック・スナイダーさんですか？」

敵を挑発しないよう柔らかく純は尋ねた。

「オーウ、ナゼシツテルンデスカ？」

スナイダーだ。間違いない

「木嶋さん。」

「ああ、私もこいつのことは知っている。危険な奴だ。」

だがこつちには非戦闘員の井村がいる。戦闘は危険すぎる。

どうすればいい？くそっ！心の焦りは隠せない

「遙ちゃん！逃げて！」

「オーツト、ニガスワケニハイカナイ」

スナイダーが銃を井村に構えた。

「嫌・・・嫌ー！」

その瞬間だった。

パン！

スナイダーの右手に持っていた銃が3人の下に転がってきた。

「遅れてすまない！」

谷塚と長門だった。

「谷塚さん！長門さん！」

「やっぱり心配でな！こつち来てみたらこのザマか、いきなり電話が切れたんだ。驚いたぜ」

形勢逆転だった。四方から銃を向けられている。スナイダーもさすがに諦めたのか

「ワカッタ、ワカリマシタ、コウフクシマース」

スナイダーは両手を挙げ木嶋に歩み寄った。ように見えた。

スナイダーは木嶋の横にあった消火器を蹴り飛ばした。

すごいキックだった。消火器は簡単に吹っ飛び爆発した。

「コンカイハミノガシテアゲマース、デハ」

「くそ！前が見えん！」

スナイダーは銃を拾い、そのまま立ち去った。

あたりには静寂が広まった。

「行ったんでしょうか？」

「助かりました。長門さん、谷塚さん」

純は2人に頭を下げた。

「行こうか、安全な場所がある。」

こうして5人は2号棟に向かった。

ゲーム残り時間

23時間8分33秒

東17 - 25西

逆転(後書き)

早めにあげます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7084k/>

---

FTH

2010年10月24日05時56分発行